言語獲得システム（自然言語認識について２）　　2014/11/29（土）

前稿に加えるべきことがらを幾つか綴ってみます。

１．時間格、場所格

動詞支配を越えて、文の発せられたステージを規定するものに時間と場所の表現があります。文が成立する時間と場所ですね。文として表現するときには、動詞支配として位置付けられています。

（例文１）３時に、公園で会いましょう。

この文から、時間格が「に」で表現され、「３時」という名詞を支配していることを推論します。同様に、場所格が「で」で表現され、「公園」という名詞を支配していることを推論します。格の表現の推定の根拠は、会話のあった状況のイメージにあります。言語学習者は話者が何を言おうとしているか把握できていなくてはなりません。

日本語にはこのほかに、「は」とか、「も」の助詞について、動詞支配を越えた、状況提示的な表現があります。

（例文２）象は鼻が長い。

「象」は「鼻が長い」という表現が成り立つ場を提示しています。これもステージという枠組みで把握できる、時間格と場所格の亜種なのです。

２．使役

使役表現の学習について考えてみます。当然、学習者は話者の意図をイメージできているとします。

（例文３）私は彼女に学校に行かせた。

（例文４）私は彼女を学校に行かせた。

どちらの表現も、

（私　make（彼女は学校に行った））

というようなイメージになります。文の入れ子になっています。これが、例文３ですと、make が（「に」・・・「せる」）という表現になることが推定できます。パターンとして学習します。例文４ですと、（私　make 彼女）が強調して学習され、目的格「を」を持つ表現として推論されます。

３．引用

引用文表現も文の入れ子構造を取ります。

（例文５）私は山が紅葉していると言った。

これも、状況のイメージを学習者が持っていることを前提とします。文を受けて「と」格が来るパターンであると推定します。

４．曖昧性への対処

並置の助詞「と」と引用の助詞「と」の弁別は微妙です。

（例文６）山と川が広がる。

曖昧性への対応は、文を聴いて、どちらがイメージとして明確な表現を発火するかによって判別することになります。「山と」では、「と」は引用というコンセプトを発火するし、並置というコンセプトも発火するでしょう。しかし、次の「言う」という動詞が来ないので、「川が」で発火が強化されるのは並置のコンセプトでしょう。この辺のことは、多義語の意味解決に汎用的な処方で、すべて共起の強さを学習していくことです。

この曖昧性への対応は、感情システムのように、オントロジー型コンセプトというものを興して、そこへの連想（重み付投票）をし、そのコンセプトの発火の強さによって、ターゲットの曖昧性群への発火を投票して行くという方式にすると体系だったシステムとして実現できます。ポテンシャル法と同じ考え方です。

おわり